

夜明けへと向かう航路 (旧 クソツタレな世界の中で) 休止中

KP 八神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

このお話はサタスペとクトゥルフ神話TRPGをベースに色々なものを混ぜ合わせた結果出来上がったものを、実際にプレイし、それをお話し風に書き起こしたものです。

ベースや混ぜ物がそういうものが多いので、薬物や食人などの描写があるかもしれませんが、苦手な方はそこだけ飛ばして読んでください。

目次

設定	1
第一幕 屍事変	
第一幕 第一話	新人加入
第一幕 第二話	襲撃
第一幕 第三話	移動
第一幕 第四話	依頼
第一幕 第五話	物資調達1
第一幕 第六話	物資調達2
第一幕 第七話	襲撃
	46
	41
	31
	25
	18
	11
	5

設定

世界観的な物

本来のサタスぺの世界ならば現実とは違った第二次世界対戦等の結果によって犯罪都市オオサカ等が出来上がりましたが、「夜明けへと向かう航路」の世界では我々のよく知る第二次世界対戦後の冷戦が三十年続き、その後核が大量に使われてしまった第三次世界対戦が発生しております。

アメリカやソ連だけでなく色々な国が第三次世界大戦によって撃たれた核の被害によって荒廃しており地球上の土地の50%がネクロニカや北斗の拳などの世紀末、終末世界のようになっています。

また、日本も復興こそできたものの当然ながら戦争の煽りを受けてしまい治安が猛烈に悪化してしまいました。それ故に自身の身を守るため日本全土で武器の携帯が許可されています。

それ以外は大体サタスぺの世界と同じです。ただ、お金のみわかりやすいように現在の価値と同じ日本円で表現します。

オリジナルの盟約の簡単な説明

新撰組

皆さんご存知の人斬り集団に銃火器が追加された、治安の悪化を憂いた天皇陛下の鶴の一声で再結成。

一応国家権力ではあるがノリが軽かったりする。具体的には銀魂

3：史実7くらいの割合

オオサカ市警が主であるが五大盟約と大変仲が悪い。

教会

この腐った世界から迷える子羊たちを救うべく立ち上がった盟約。修道士たちは一般の修道士、悪魔祓い、執行者の三つに分類されている。

五大盟約とソロモンと仲が悪い。

学会

知的欲求を満たすために、あらゆる事を追究し続ける変態どもの集まり。

派閥が百以上ある。

工房と犬猿の仲。

工房

武器や薬品などの実物を作るエキスパートの集まり。

学会と犬猿の仲。

狩人協会

ブラッドボーン世界の狩人達の流れを継いだもの達。

教会以外とあまり仲は良くない。

帝国

栄光の大日本帝国を取り戻すため日夜働いている集団。クローンやアンドロイドの技術が発展している。

新撰組と五大盟約が仇敵。

ドール

ネクロマンシーより送られてきてしまった可哀想な死した少女達、

日夜オオサカの悪意から姉妹を守るために戦っている。

五大盟約と学会と大変仲が悪い。

ソロモンの指輪

ソロモン72柱の悪魔を自称する幹部達を中心に作られた盟約。

悪魔召喚や神話生物との接触も行なっているとか。

全ての盟約と敵対。

夜明けの幽霊船について

夜明けの幽霊船とは、初期のメンバーである八神修と紅麗麗、教会と狩人協会より選出された2名が所属している四人組の亜侠のチームである。

主に亜侠としての仕事だけでなく、盟約からの重要な依頼を受けることも多々ある。

所属メンバーの概要（一部）

リーダー

八神修くやがみ おさむ＞31歳 男性

ハネ毛の黒髪で基本的にスーツを着ている。

主な武器は腰に下げた二丁の銀のリボルバー、彼曰く師匠のお下がりにらしい。

どんな厳しい依頼でも生きて帰ってくるため死神やキャプテン・デスなどの二つ名がある。

魔法が使えるらしい。

割と高スペック。

STR13 DEX15 INT16

CON18 APP15 POW16

SIZ14 SAN40 EDU19

一番槍

紅麗麗くホン レイレイ＞22歳 男性

長身痩躯なイケメン中国人。

本人曰く中国拳法は大抵使えるらしい。

腰まで伸びた黒髪が特徴、服装はあまりこだわらない。

世話を焼くのが好き。

李書文の血族らしい。

女性だけでなく男性人気も高くて本人は困惑気味。

STR13 DEX18 INT10

CON12 APP18 POW15

SIZ16 SAN70 EDU9

小悪魔

リリイ 16歳

教会所属の悪魔祓い。

イギリス人らしいが詳しくは不明。

ボブカットの金髪に修道服が普段の服装。

猫が好き。

とある疑惑を持っている。

STR 7 DEX 13 INT 13
CON 14 APP 17 POW 18
SIZ 12 SAN 85 EDU 10

氷の乙女

ヴィクトーリア・ペンテジレーア・アレクサンドラ・アルブレヒト・
ジャンヌ・ド・ロレーヌ||ドートリツシュ

19歳 女性

名前が長すぎるため仕事外ではヴィクトーリア、仕事中はペンテジ
レーアと呼んでもらうようにしている。

マリーアントワネットと同じ家の血をを引いている超が付くほど
の名門貴族の出であるが、己の血に刻み込まれた記憶を思い出し、狩
人に。

実はトロイア戦争で有名なアマゾーンの女王の血も継いでおり先
祖返りしてしまっているとか。

幽霊船の中で一番設定が濃い。

STR 20 DEX 12 INT 18
CON 20 APP 17 POW 10
SIZ 11 SAN 50 EDU 20

第一幕 屍事変

第一幕 第一話

新人加入

ズキズキと痛む頭を抑え、布団を体から引き？がしながらゆっくりと体を起こす。

霞む目を時計へ向けると時刻は9時30分、仕事を入れておかなくて正解だった。

ベッドからゆっくりと降りると鏡に向かい毎朝の日課である自己確認を始める。

「八神修《やがみ おさむ》、31歳男、好きなものは酒と煙草と珈琲。今現在は二日酔いで頭が痛い。毎日やってるこれはヤク中の妄言みたいで大嫌いだ。」

昨日の宴会の残骸で散らかっている部屋の惨状をどう片付けるか考えながら朝食の用意を始める。

今日はちよつと豪華にトーストとベーコンエッグにしよう。

そういえば昨日の依頼人は無事に帰れただろうか？今回の報酬はなんに使おうか、などと考えてるうちに朝食が出来上がってしまった。

いつもの通り両手を合わせ、感謝の言葉を口にした後食事を始める。

食事を終わるとほぼ同時のタイミングで携帯がやかましく自己主張を始めた、クソツタレこっちは久方ぶりの休日だったのに。

苛立ちを抑えながら電話を取り通話ボタンを押すと聞き馴染みのある明るい声が聞こえてきた。

『あ、もしもーし？ リーダー？ 昨日言ってた新メンバーの候補見つけたから11時にジエイルハウスのいつもの部屋に来てくんない？』

「冗談じゃねえよりリイ、こちとら1週間ぶりの休日だったのになんでわざわざ仕事しなきゃなんねえんだよ。」

『えー、使える人材探しとけって言ったのリーダーじゃん。それに面

接みたいなことするだけだから、ね?」

自分が頼んだ仕事を部下がすっかりこなしてしまった以上こちらが何もしないというわけにもいかなかった。面倒だが。

「あー、はいはい、りよーかい。11時にいつもの場所な、そっちは誰が来る予定なんだ?」

『レイレイは居るみたい。』

「あいよ、金はいつも通りでいいな?」

『オツケー、リーダーの進む道に主の導きのあらんことを。なんてね。』

終話ボタンを押し、大きく重い溜息を吐く。

どうやら休日はお預けのようだ。

家を出て馴染みの顔と挨拶を交わすと、銘が掠れてしまつて読めなくなった煙草に火をつけ、煙を補給する。

「安かつた割には悪くない香りだ、どこで買ったんだったかな。」

そう呟きジエイルハウスへと歩き始める。

<<幸運：80——>>23 成功!>>

いつもの雑居ビルに入り、薄暗い地下行きの階段を3階分降りると、”Jail House”と書かれた小さな札のかけられた立て付けの悪い木製の扉が中の喧騒と光を漏らしながら出迎えてくれた。

腕時計を確認すると時刻は10時30分ちようどで予定の時間よりは少し早かったが時間はいくら余裕があつても損をするものではない。

扉を開くと社会不適合者やその予備軍たちの馬鹿騒ぎが鼓膜を揺らす、二日酔いの頭にはなかなか効くがやはり性根のせいか心地良く感じる。

しかしながら、せつかくの新人候補が「利き腕」みたいな面倒なやつらに潰されてしまつては困るのでリーダーの責任的に一応周囲を確認しておく。

<<目星：60——>>50 成功!>>

目を凝らし周囲を見回すと、奥で「利き腕」が新しい女を口説いて

いるのが確認できた、少なくとも今日1日は問題なさそうだ。

さて、後の問題は新人がどんな奴かってとこだが、まあ言葉さえ通じればなんとかなるだろう。

そう思い歩いていると目的の個室の前に緊張した様子で立っている女性を見つけた、年はだいたい18前後だろうか。

トップアイドルと言われても納得できるような整った顔立ちとスタイルをしている上に、レディーススーツにハイヒール、アクセサリには真珠のピアスと身なりからしてこの場には全くもって不自然な女性だが、もしや仕事の依頼か？それなら勘弁なんだがなあ。

しかしその感情を顔に出さぬよう努めながら女性に声をかける。

「そこは夜明けの幽霊船の個室だが依頼かい？」

「あ、いえ、私はその夜明けの幽霊船に加入するために来ました。あなたはリーダーの八神さん、ですよね？」

まさかの新人だった。

「ああ、俺が夜明けの幽霊船のリーダー、八神修だ。とりあえず中入ろうか。」

そう言い、新人が何か言う前に個室の中へ連れ込む。

中へ入ると色白優男のへべれけがソファの上でいつも通り気持ちよさそうにくたばっているのが目に入る、近くのローテーブルには空の酒瓶が所狭しと並べられていた。

新人を適当な席に座らせると壁にかかった内線で適当な酒と軽食を注文する。

さて、今回は当たりだといいが。

そう思いながら改めて新人へと視線を向ける。

やはりいきなり部屋に連れ込まれたせいか警戒はしているようだが、どうしてもへべれけのチャイニーズが気になって仕方ないのかチラチラとそちらへ視線を向けていた。

そんなあまりにも普通な反応に少し笑みを浮かべながら新人へと話しかける。

「改めて自己紹介といこうか、俺はこの夜明けの幽霊船のリーダーを務めている八神修、そっちでくたばってるアル中は紅 麗麗《ホン

レイレイ》うちの一番槍だ。あんたは？」

そう問うと新人は驚いたようにびくりと肩を浮かせ口を開いた。

「私は新田飛鳥《にった あすか》といいます、面接があるのでここに来るようにとリレイさんに言われていたのですが。」

「なるほど、その服装は面接って聞いてたからか。随分と真面目だな？ アンタ。」

「新田です。」

「はいはい、新田ちゃんね。年は？」

「今年で19歳になります。」

「へえ、19か。学校は？」

「高校は卒業しました、大学にはいきません。」

その後もいくつかの質問をして、問題がないかの確認をする。

今のところはクソ真面目な女の子つてとこだ。

「じゃあちと早いが最後の質問といこうか。なんでここに所属しようと思ったんだ？ リレイに誘われた程度なら断れるだろうし、断ったとしてもあいつも追及しねえだろうさ。」

そう聞くと新人は顔を暗くし、俯いてしまった。

しかし2、3秒の沈黙の後、再び口を開いた。

「……………お金が、必要だからです。」

「金ねえ。新田ちゃんの顔ならアイドルなんて簡単にできるだろうし、下世話な話だが体つきも悪くねえからそれを売っちゃえば簡単に金なんぞ手に入るだろうさ。それなのにどうしてわざわざ危険な“これ”を選ぶのさ。俺としちやそこがわかんねえと首を縦には振れねえ。」

「……………」

「だんまりかい、それじゃ面接は終「妹が……………病気になったからです。」

そこから新人は少しもりながらも事情を語り出した。

妹が難病にかかってしまい、その治療にどれだけ体売っても払えないほどの莫大な費用がかかる。というこの世界ではありふれた御涙頂戴にすらならない話だった。

「前々から私と仲良くしてくれていたリレイちゃんが、その話を聞いて

たみたいで私にここを紹介してくださいましたんです。」

「……………へえ。話は終いかい？」

「……………はい。」

正直言ってしまうと俺からすればクソほどどうでもいい話だったが、だがリリイがここを紹介する程の人材をみすみす見逃すのも不味い。どうしたものか、と考えていると注文した酒と軽食を店員が運んできた。

「まあ、とりあえず飯食いな。なんも食ってなかったんだろ？」

「……………ありがとうございます。」

そう言うとな人は遠慮しながらゆつくりと食事を取り始めた。俺も運ばれてきた串焼きと強めの酒を手に持ち、先程の話を続けるべく口を開く。

「で、何ができるのさ。」

その問いに希望でも見つけたのか、新人はこちらに驚いたような顔を向けてきた。その間抜けな顔に笑いそうになりながらも一度聞いた。

「何ができるのさ。」

「えっと、基本的にはオオサカベン、日本語、英語、中国語、ドイツ語や他にも五カ国の言語の会話と読み書きができます！あとは数学と物理学、薬学が得意です。」

なので多少ならドラッグや医薬品の調合も、機材さえあれば出来る筈です。」

正直驚いた、十個の言語を理解しているのもそうだが、まさか薬の調合ができるとは。これは逃すわけにはいかなくなってしまった。

「リリイへの報酬を増やしてやらないとな。」

「へ?。」

「……………そ面接は終了だ、結果は合格。今日からよろしくな、新田ちゃん。」

そう言い新人の肩をポンポンと叩くと、彼女は声を上げて泣きだし

てしまった。

困ったな、女を鳴かせるのは嫌いじゃないが泣かせるのは嫌いなんだ。

第一幕 第二話 襲撃

「泣いてる暇はないぞ、次は契約の確認だ。」

「そう言い空のグラスに酒を注いでやると、新人は涙を誤魔化すようにそれを一気に煽った。」

「おいおい大丈夫か、その酒はかなり癖が強いはずだったが。」

「などと心配していると、案の定新人は顔を青くし口を押さえ、トイレへと駆け込んで行った。」

「んで？お前はいつまで死体ごっこを続けるつもりだ？」

「あれやっぱバレてた？いやー今回は割と自信あったんだけどなあ。」

「顔を真っ赤にした長身痩躯の美男は笑いながら体を起こし、机の上の酒に手を伸ばす。」

「で、お前から見てどうだった。」

「そだなー、言葉通りの戦力としては微妙だろうなあ。でもしつかり育ててやればあの子は化けるだろうさ、良くも悪くも将来性がありそうだな。」

「聞いてただろうが、調査ができるらしいぞ。」

「それが決め手だろ？」

「当然、まあリリイが連れてきたって時点ではほぼ確定してたがな。」

「人を見る目は良いもんなあ。」

「そんな話をしてしていると、新人が少し顔色を良くして戻ってきた。」

「突然出て行った上に、お待たせしてすみません！」

「大丈夫大丈夫、俺も今起きたとこだからさ。リーダーから聞いていると思うけど俺の名前は紅 麗麗よろしくね。」

「はい！よろしくお願いします。」

「んじゃあ、あー……、どこまで言ってたかな。」

「えっと、契約のお話を始めるってところからだっただけです。」

「ああ、そうだったな。じゃあまずは報酬金の話からいこうか。」

「はい！」

新人は勢いよく返事を返すと、メモとペンを取り出した。

「まーじめー。」

「茶化すな、んで報酬だが基本的に依頼に参加したメンバーで山分け、前金は準備費用とかに消えるから俺たちの懐に入ることはないぞ。」

「あの質問よろしいですか？」

「何だ？」

「依頼の途中で怪我をしてしまった場合はどうなるんでしょうか？」

「依頼中の怪我に関しては全額こっちが負担してやる。まあ、体を機械化するとかは知らんがな。依頼の遂行が困難な程の怪我を負った場合は、その途中までの働きと依頼成功への貢献度をこっちで判断してそれに見合った金が払われる。不参加の場合はもちろんなしだ。」

「勝手な想像ですけど、もっとブラックなものを想像してました。」

新人はそう言いながら少し苦笑いを漏らす。

失礼な奴だ。

だがまあ、その気持ちも分からなくもない。

なんたつて亜侠は世界で一番死傷率の高い仕事だからだ。

今日会話した亜侠が明日にはホトケ肉として売られてることなんてザラにある。

「まあ、うちは他のとことは違うからねえ。なあ？リーダー。」

「そうなんですか？」

「ああ、そうだ。うちは盟約が仲良しこよしするために構成された亜侠グループなんadena、多少の怪我は自己責任とはいえ、他とはかけられる金の桁が違う。」

「へー、リーダーとレイレイさんは何処の所属なんですか？」

「あー、俺たちは根っからの亜侠だ。どこにも所属しちやいねえ。」

「そうそう、元々幽霊船の乗員は俺とリーダーだけだったんだぜ、でも五大盟約以外の大きい盟約達が協定を結ぶとかなんとかで、その一つとして俺たち幽霊船が選ばれたつてわけ。」

「餅は餅屋つてことだ、慣れてない奴らを集めてグループ作るより元々あるところに入った方が色々と便利だろう？」

「成る程、リーダーとレイレイさんの他にはどのような方がいらつしやるんですか？」

メンバーの紹介はもう少し後にやるつもりだったが、順番が前後するだけだし問題ないだろう。

「リーダーの俺、一番槍のレイレイ、情報担当で教会所属のリリィ、財布の紐を握ってる狩人協会所属のヴィクトーリア。この四人がさっきまでの幽霊船のメンバーだ。」

「リリィちゃんとは知り合いみたいだし説明はいらないよね。ヴィクトーリアの姐さんは仕事の時はザ・狩人って感じの人だけど実はスツゲエ乙女なんだよな。」

「言つてやるな、仮にもここに来るまでは普通の令嬢だったんだから不思議じゃないだろう。」

「そうなんですか?」

「うん。戦闘中は自分のモツが飛び出ようが、どんだけグロい虫相手だろうが冷静でき、まるで機械なんだけど。オフの時は恋バナに花を咲かせたりお茶会開いたり、動物愛でたりとかまさに乙女って感じなんだよな。」

ありやもはや多重人格だぜ、なんて言っているレイレイを横目に、静かにポケットで震えだした携帯を取り出す。

噂をすればなんとやら。ってやつだろうか、ヴィクトーリアからだった。

「もしもし?何か問題か?」

『リーダー、緊急なので手短に報告しますね。そちらに正体不明の武装勢力が向かっています。数はおよそ三十、武装に統一性は無し。性別等にも関連性は無し、目的は不明です。』

「了解、気をつけろよ。」

終話ボタンを押し、二人へ目を向けるとレイレイはすでに戦闘の準備を整えていた。

「新田ちゃん、悪いが早速の仕事だ。今ここに目的不明の武装集団が向かってきている。俺とレイレイは他の亜狭達と迎撃するから新田ちゃんは息の残ってるラツキーな奴を拘束してくれ。」

「ツシヤアツ、久し振りの喧嘩だあ!リーダー!見敵必殺でいいよな!?!」

「一、二人生きてれば十分だ、いつも通り好きに暴れな。」

「ちよ、ちよつと待ってください！戦闘を行うのは仕方ないとして、せめて武器と拘束具をくださいませんか!？」

「俺の鞆の中に手錠と新田ちゃんでも撃てる銃が二、三入ってる、それ使いな。」

そう言い、腰のホルスターにさした二丁のリボルバーに指をかける。

しかし他の施設ならともかく”ジェイルハウス”に襲撃を仕掛けるとはとんだ命知らずな奴らだ、まさかとは思うがオオサカの外部からか？

これは今考えても仕方ないと思いを切り替え、個室の外へと飛び出し周りの荒くれ達に聞こえるように声を上げる。

「敵襲！数二十前後！俺たちの憩いの場を荒らそうとする不屈き者どもに礼儀を教えてやりなクソツタレども！」

そう言うのと亜狭達は一瞬で各々の武器を構え、近くの出入り口へと穴が空く程の熱を持ちそうな視線を向ける。

そうして十秒ほど経った頃、一つの扉が爆散し、それが狼煙となり大乱戦が始まった。

俺は出来るだけレイレイのサポートに努め、相手の行動を観察するが、どうにも違和感を感じる。

<<アイデア：80——>>3 クリティカル！>>

3度目のリロードの時にふと敵の一人と目が合い違和感の原因に気づいた。

やつら、統率が取れすぎているんだ。

装備から何からバラバラのくせに戦線のカバーや連携があまりにも完璧すぎる。

事前に入念に打ち合わせをしていた、と言われてしまえば終いだが、だからってこれはあまりにもできすぎている。

「花丸100点をあげたくなるような連携だな！リーダー！」

「全くだ、まるで帝国の連中を相手にしてる気分だよ。」

「まあ、この程度あいつらと比べるとなんてことないけどな！」
「違くない。」

その言葉の通りどれだけ統率が取れていようが数には敵わないよ
うで、ゆっくりゆっくりと襲撃者たちが放つ弾丸は数を減らしてい
く。

「リーダー！新田ちゃん大丈夫かな!？」

「問題ないだろうさ、この程度で死んじまう目はしてなかった。」

「そっちもそうだけどさ！捕虜の方！」

「それこそ心配いらないな。」

「なんでさ?」

「さつき、ガキをひきずって連れて行ってるのが見えた。」

「じゃあもう気を使わなくても?」

「構わねえ。」

俺の言葉を聞くや否や弾丸のような速さで敵陣のど真ん中へ飛び
込んでしまった。

全く、誰がカバーすると思ってるんだ。

銃声や怒号が鳴りを潜め始めた頃を見計らってレイレイへ撤退の
指示を出す、少し不満そうな顔をしたが直ぐにこちらへと来る。

「戻るぞ、もう俺たちがやる必要もないだろう。」

「ういうい。」

かなりの数の穴が空いてしまった扉を開き、個室へと戻ると新人が
ガリガリの捕虜を抱きしめ泣いていた。

「????? どうなってんだこりゃ、新田ちゃん。説明くんない?」

「ううう、リーダーざああん、レイレイざああん。この子保護じであげ
れませんかあ?」

「とりあえず聞き出した話報告してくれや、処遇はそのあと決める。」

新人の話によるとこのガキは人間市場で買われた孤児らしく、解放
されても行くあてがないらしく、このままだと確実に死んじまうだろ
うから保護したいらしい。

「新田ちゃんやい、そのガキがどう言う立場かはわかったがなんでこ

「ここに襲撃かけたのかは聞けたのか?」
「うう、ごめんなさい。泣いちゃって聞けてないですう。」
「あちやー、どうする?リーダー?俺たちが聞き出す?」
「いや、新田ちゃんに任せる。」
「新田ちゃん、今日中にその子から情報を聞き出しな、それができたら保護も考えてやる。」
「本当ですか!?頑張ります!」
「あくまで考えてやるだけだぞ。」
そう言い残し、レイレイを連れ部屋から出る。

これからどうするべきか考えていると急に視界がレイレイの顔で埋め尽くされた。

「リーダーどしたん?悪いものでも食べた?」
「何言ってるんだ。」

「だってさあ、いつものリーダーならどんな相手でも銃突きつけながら尋問するじゃん?それなのに今回はそれしなかったのが疑問でさあ。」

「分かっただろうに。」

「やっぱテスト?」

「そうだ、捕虜の選別及び確保、情報の聞き出し方から扱い方まで。色々見るつもりだが基本はこの辺だな。」

「やっぱリーダーはリーダーで安心したよ。」

「どう言うことだよ。」

「あ、あとさ。保護って本当にするつもりなん?」

「俺は嘘はつかんよ。」

「加入はさせんの?」

「能力と働き次第だな。だがまあ、心配はいらんだろう。」

「あ、また悪い顔してらあ。」

レイレイの言葉を見無視し、考えをまとめる。

「よし、だいたい決まった。」

「んじや、これからどう動くよ。」

「情報を聞き出し次第全員集める、ありったけ準備する様にヴィツキーに伝えておいてくれ。」

「りよーかい。」

「ところでよう。」

「どうした？リーダー？」

「俺そんな悪い顔してたか？」

第一幕 第三話 移動

レイレイにヴィクトリアへの連絡を頼み再び個室へと戻ると、新人が捕虜のガキを膝に乗せ飯を食わせてやっていた。

「新田ちゃん、移動するぞ。準備しな。」

「へ？移動ですか？」

「おう、アジトに招待してやる。」

「は、はい！急いで準備します！」

すつ転ぶように立ち上がり新人は荷物をまとめ始めた。

新人を待つ間改めて捕虜を観察する。

140に満たないであろう背丈に、ボサボサに傷んだ極めて白に近い金色の長髪、枝のような手足に片目は眼帯をつけている。

手足には縫い付けたような跡や一部皮膚の色が違うところもある。

部屋の隅に置かれたライフルは、銃剣こそ付いているものの何がベースになっっているのかわからないほどのお粗末なコピー品だ、一目見ればわかるような捨て駒だ。

などと思いつつ観察を続けていると捕虜と視線があつた。

「殺さないの？」

「殺して欲しいのか？」

「……………わかんない。」

そう言うところらを見たまま黙り込んでしまった。

溜息を吐きながら尋ねる。

「名前は？」

「……………十五番。」

「クローンか？」

「わかんない。」

「何のためにここに来た。」

「いっぱい殺せばお母さんに会えるって言われたから。」

「誰に。」

「わかんない。」

再び大きな溜息を吐き、煙草に火をつけた。

いざ吸おうとした瞬間、携帯から明るい音楽が流れる。

「こちらリーダー。」

『リーダー、こっち車回してビル前いるからいつでもいいぜ。』

「ああ、もう少し待ってくれ。」

『姐さんとリレイも先に事務所に行ってるってさ。』

「了解。」

根元近くが灰になり始めた頃に、新人が荷物を持ちこちらに歩いて来た。

「お、お待ちせしました。」

「いや問題ない、そのチビも連れて来な。」

「はい！行こっか、カレンちゃん。」

聞き覚えのない名前を疑問に思い新人へ顔を向ける。

「そのチビの本名か？」

「あ、いえ、私が勝手につけたんですよ。赤い靴履いてましたし、境遇も似てるみたいですから。」

はて、どこかで聞いた話だったがなんだったか。

<<<アイデア：80——>>52 成功！>>>

「童話か。」

「ええ、どうしてかこの子を見た時からこの名前が頭にずっと残ってて。」

「悪くないんじゃないか、見た目もヨーロッパンっぽいしな。しかしよく童話なんぞ知ってたな。」

「小さい頃、母によく読み聞かせてもらってたので…」

「そうかい。」

個室の外へと踏み出すと、先程の襲撃なんて影すら見えない程になにもかも元どおりになっていた。

さすがと言うしかないな。

外に出ると気の沈むような真っ黒な雲が空を覆っていた。しまつたな服を干しっぱなしだったかもしれない、降らないといいんだが。

などと考えながらカスタムし過ぎて原型のない装甲車へと二人を連れ歩く。

「これが俺たち幽霊船のフラグシップ、ゴライアスだ。まあ、船じゃねえんだけどな。」

「なんというか、もはや戦車みたいですね。」

「ああ、説明は乗ってからしてやる。足下気をつけな。」

二人を後ろから持ち上げてやり、ゴライアスに乗せる。タラップを付けてやるべきか？

しかしまあ、二人ともとんでもなく軽い。

ガキの方は見た目からわかっちゃいたが新人がここまで軽いとは驚いた。胸もそこそこあるしもう少し重たいと思ったんだがな。

二人を後部に乗せてやった後助手席へと座る。

「おつかれ、リーダー、新田ちゃん。んじやあジェイルハウス発、事務所行きゴライアス発車しまあーす。」

発車から数秒もしないうちにレイレイがガキの方をチラチラと見だした。

「お前の趣味じゃなかったと思うがな。」

俺がからかうようにさういとうと、レイレイは口をへの字にしながら答える。

「いやそうじゃなくてな、そのチビ誰かに似てる気がしてさあ。」

「カレンちゃんがですか？」

「お、早速名前聞き出せたのかお手柄だぜ新田ちゃん。」

「あ、いえさういう訳じゃなくてですね。カレンちゃん名前がないみたいなんで私が付けたんですよ。」

「そうだったかあ、まあ呼びやすい名前でいいんじゃない？いやーでも誰に似てんだろ？どつかで見た気がするんだよなあ。」

「その話は後でいいだろう、今はアジトについての説明だ。」

「あ、ちよつと待ってください。すぐメモを取り出しますんで。」

「メモを取るほどのことでもないが、まあいい。説明を始めるぞ。」

新人の元気な返事を聞き、説明を始める。

「今向かってるのは俺たち幽霊船のアジトだ。事務所って呼ばれることが多いな。」

「リーダーと俺はアジトって呼んでるぜ。」

「アジトには俺たちの使う武器や金、情報を保管してある。一応一人一つ部屋が用意されてるからそこで寝泊まりも可能だな。」

「足は今俺達が乗ってるゴライアスと超速いバイクのチーターがあるから好きに使って構わないぜ、ただリーダーのお気に入りの黒いバイクは使っちゃダメだぜ。万が一許可なく使っちゃったらどうなるかは保障できないかもな。」

「そこまで酷いことはしねえよ。」

「嘘つけ、俺ボッコボコにされたじゃんかよ。」

「お前が大きな傷こさえてきたからだろうに。」

「だからあれ俺悪くないって言ってるじゃんかよお〜」

「まあいい。足の説明だが、今乗ってるゴライアスはRPGを四、五発食らっても余裕で動ける装甲があるし、馬力も戦車を二台程度なら引き回せる程度にはあるから危険な仕事に向かう時に使うといい。チーターはケチャップが想定される時にぴったりだろう。」

「あの、質問いいですか?」

「どうした。」

「ケチャップってなんで?」

ミスった、用語の説明を忘れていたな、最近は同業者ばかり相手にしていたものだから通じると勘違いしていた。

「ケチャップってのは追いかけてここをさすぜ。おつかない相手から逃げるときや、自分が相手を追い回すことを言う時に使うな。」

したり顔でレイレイが解説をする。

そういえばこいつは世話を焼くのが好きだったな。

「さて。アジトのほうの説明に戻るが、基本的にアジトにはレイレイカリレイが居るはずだから何かある時にはアジトに向かうといいだろう。」

「そうそう、大抵はアジトかジェイルハウスのさっきの部屋にいるぜ。」

「部屋はさつき言った個人の部屋と金庫室、会議室、資料室と尋問室に執務室、あとは依頼を受けるための応接室があるな。」

「依頼はジェイルハウスで受けるんじゃないんですか？」

「同業者や一般人からの依頼ならそっちだが、盟約やあまり表沙汰にしたくない奴らからの依頼は事務所で内密に受けることが多い。」
「なるほど。」

説明して初めて気づいたがアジトについて話すことがあまり多くない、というか殆ど話尽くしてしまった。

他に説明しておくことは何かあっただろうか。

次の話題を考えているとレイレイが思い出したかのように口を開いた。

「そういえばリーダー、新田ちゃんの仕事ってもう決まったのか？」

「一応は俺かりリイにつかせようと考えてるが、どうかしたか？」

「いや、それについては問題無いんだけど、カレンの方はどうするのかなく、って思ってた。」

「なんだ、やっぱり欲しいんじゃないか。」

「いやさ、そっちの意味じゃ無いからね？ただかなり”いいセンス”してそうだからさあ。吐かせるだけ吐かせてポイはちよつともったいない気がするんだよ。」

レイレイからの戦闘以外の提言に驚きを覚える。レイレイの一生の憧れだという傭兵が言っていたという「いいセンス」を使ってまで捕虜の保護を求めたのだ、普段ならリーダーに任せるなんて言うて全部丸投げするのに。

「やはり惚れたか？」

「リーダー、いい加減にしてくれよ、違うって言ってるじゃんかよ。とかかくう！そいつは新田ちゃんと同じで伸び代があるから俺らで育てたほうがいいって言ってるの！」

レイレイが肘で俺の脇腹を小突く。

「わーったわーったから、しっかり前見て運転しろ。」
「ったく。」

アジトまであと数分、と言ったところで唐突に新人が大声を上げた。

「ええっ!? そうなの、カレンちゃん!」

「うおおっ! 危ねえ。急にどうした新田ちゃん、いきなりでかい声出されるとビビっちゃうぜ。」

「ご、ごめんなさい。でも! カレンちゃんが大切な事を教えてくれたんですよ!」

興奮気味に話す新人の様子に、その大切な事についての期待を寄せる。

「なんと! カレンちゃん記憶喪失らしいんです。」

「ダメじゃねえか。」

<<< アイデア : 80 —— >>> 44 成功! >>>

レイレイは呆れたようにそう言うが、俺はあることに気づいてしまった。

「いや、お手柄だ。チビ助の正体がわかった。」

「「え!」」

「つぎはぎの体に記憶喪失と来りやドール、だろうな。」

「ドール: お人形ですか?」

「あながち間違っていないだろうさ、悪趣味な奴らが自分の楽しみのために他人の体をいじくりまわして作ったお人形だな。」

確信を持ってチビ助に問う。

「チビ助、ネクロマンシーって言葉に聞き覚えがあるだろう。」

「: お母さんのこと。」

「やつぱりな。新田ちゃん、良くこのチビ助を捕まえたな、お手柄だぜ。予定変更、このチビ助も新人だ。レイレイ、スピード上げろ超特急だ。」

「良くわからんがりよーかい! 全速前進だあ!」

その言葉と同時に体全体に猛烈なGがかかる。

「うううう、レイレイさん、圧が、圧が強すぎますう。潰れちゃうううう。」

「おい、レイレイお前また増やしたのか。」

「おう、ロケットブースターとエンジンを一つずつ増やした！」

「新田ちゃん、チビ助、大丈夫か？」

「……………」

「あーちらら、気絶してらあ。」

第一幕 第四話 依頼

数分もしないうちにアジトに着いた、地上二階地下一階の立派なアジトだ。

「とうちやーく。ハンガーに停めてくるから先に行つててくれ。」

「ああ、頼む。」

一度ゴライアスから降り、二人を降ろそうと後部座席へ向かう。

扉を開けるとチビ助は自分で起きていたようなので脇を抱え降ろしてやった。

「ありがとう…」

「いい子だ。」

チビ助は頭を撫でられ、気持ちよさそうに目を細める。

自分でもなぜチビ助の頭を撫でたのか分からず、勝手に動いた右手に困惑してしまうが、しかし悪い気はしないのでまあ、よしとする。

「新田ちゃん、到着だ。起きな。」

「う、うーん。…あれ？もう着いたんですか？」

「おう、ここが俺たち幽霊船のアジトだ。先に会議室行くぞ、他のメンバーは揃つてるみたいだ。」

アジトの中に入り新人とチビ助を会議室へと先導する。

会議室の扉を開けると、俺の苦手とする人物が出迎えてくれやがった。

「ああ、遅かったじゃないかい坊や。お茶いただいてるよ。」

「おかえりー、リーダー。ヴィツキーは今ハンガーに居るよー。」

リリイとヴィクトーリアは俺が招集したから当然だが

「なーんであんたがいるんだ、シスターミラー。今日は老人会の茶会じゃなかったのか？」

「なあに、爺婆のつまらん暇潰しなんで出てやる必要なんぞないさね。あれに出るくらいなら死ぬ方がよっぽど有意義さ。それより、新人を雇ったそうじゃないか、顔を見にきたんだよ。後ろの二人がそうかい

？」

「そうだ。ほら二人とも、暇を持って余した婆さんに挨拶してやりな。」
「そう言い俺の背に隠れてしまっていた二人を前に出す。」

「は、初めまして。本日より夜明けの幽霊船に所属させていただきます。
新田飛鳥です。よろしくお願いします。」

「……カレン。よろしく…お願いします。」

二人の自己紹介を聞くとミラーの婆さんは元々シワの多い顔を更にしわくちやにして微笑んだ。ここだけ見れば聖母とも言えそうな見た目なんだがなあ。

「飛鳥に、カレンだね？すっかり覚えたよ。私はミラー、この街でシスターをやってる婆さ、たまにここでリリイと茶を嗜んでるよ。」

そうなのだ、ミラーの婆さんはいつのまにかアジトに入り込んで茶を飲んでいる姿をよく見ている。リリイに何度か注意したのだが

……

「それで私が幽霊船のアイドル、リリイだよ！よろしくね！」

この調子だ、望み薄だろう。

「で？本題は？まさか本当に新人の顔を見に来ただけじゃないだろう？」

「なんだいそんなに急かしたって良いことないだろうに。まあいいさね。」

「そういうとミラーの婆さんはリリイに合図を出して、紙束を差し出させてきた。」

「”ドール及びネクロマンシーに対する盟約の動向”？」

「そうさ、カレンもそうだがオオサカでドールが確認されているだろう？」

「ああ、だが今に始まった話じゃないだろう。」

「そうさね、十数年前から確認される頻度が増えたのは確かだ。だがね、今回は異様なのさ。」

「異様なあ？」

「まあ、全員揃ってから話そうかね。」

「そういうとミラーの婆さんは茶を一口飲みゆつくりとため息をこ

ぼす。

「はい、リーダー。お茶入ったよ。」

「おう。」

とりあえず一口茶を口に含む、欲を言うならコーヒーが良いが淹れてくれた以上文句は言えん。

珍しく紅茶ではなく緑茶だったがたまには悪くない。

数分程茶を嗜んでいると、会議室の扉が開いた。

「お待ちせしました皆さん。」

「よう、おまたせえつて。げえっ！ババア！」

「随分な挨拶じゃあないかいヤンチャ坊主、もう一回礼儀を叩き込んでやろうかい？」

ギヤイギヤイと喧しいレイレイを無視してヴィツキーに話しかける。

「お疲れさん、首尾は？」

「ダメね、貴方に頼まれた情報を全て洗い出したけれど何一つ引つかからなかったわ。」

「婆さんから話は？」

「聞いたわ、それについて説明するためにシスターが来てくださったみたいよ。」

「そうか、新人は後で紹介するつもりだがなかなか良さげだぞ。」

などと話しているとミラーの婆さんから声がかかる。

「揃ったみたいだからそろそろ話すよ、さっさと座りな。」

新人とチビ助に席を案内してやり、自分の椅子に座る。

相変わらず真剣な顔のミラーの婆さんの威圧感はこたえる。円卓を挟んで反対側にいるはずなのにブルツちまいそうなくらいだ。

「さて、本題の前に飛鳥とカレンに一つ聞こうかい。二人はドールとネクロマンシーについてどこまで知ってるんだい？」

「私は名前だけですな、内容は全く知りません。」

「……ドールは私や姉妹のこと……ネクロマンシーはお母さんのこと……」

「そのくらいかい、なら一から説明しようかね。まずドールだが、動く死体ってのが一般的な認識だね。」

「動く、死体、ですか。」

「そうさ、死体を組み合わせてゾンビもどきにされたのがドールさね。」

「と言うことは、カレンちゃんは、一度死んでるってことですか。」
「そうなるね。」

新人の目がチビ助を見る。

「…うん、私は…一回…死んでるよ…」

しかし、そう言うチビ助の顔に陰りはなかった。

「一度ドールになっちまうと首を刎ね飛ばされようが、心臓を潰されようが生きてるんだとさ。」

「うん、…そのくらいじゃ…私は…死なない、…多分…?…私って今…生きてる…の?…」

「私に聞かれてもわかりやしないよ、でもまあ生きてるで良いんじゃないかい?…」

「じゃあ…生きてる。」

じゃあで決めて良いものなのか?…」

「カレンも言っていたが、同じネクロマンシーに作られたドールは姉妹と呼び合ってお互いを守り合うそうだよ。カレンは姉妹がどこに居るかわかるかい?…」

「…わかんない…」

<<<心理学…??>>>??>>>

個人的にも気になっていた問題だが、チビ助の言葉に嘘はなさそうだった。いずれは見つけてやらんとな。

しかし、仕方ないとはいえ口を挟めずひたすら聞きに徹するのはつまらん。

「ドールについてはなんとなくわかりました、でもネクロマンシーはどうしてドールを作るんですか?…」

「急かすんじゃないよ、ちゃんと説明してやるさね。」

懐から煙草を取り出そうとするが、婆さんに目で止められてしま

う。

子供の前だからやめろってか。ちいさなため息が漏れる。

「さて、ネクロマンシーについてだね。ネクロマンシーは孤独に酔っちまった奴らのことさ。飛鳥はオオサカの外について知ってるかい？」

「たしかまだ復興できてない土地がたくさんあるとか。」

「そうさ、そこを箱庭にして自分で作ったドールや出来損ないで遊んでるのがネクロマンシーさね。ネクロマンシーは自分の欲のためにドールを使ってるってわけさ。」

「なるほど、ならどうしてオオサカにカレンちゃんみたいな子達が居るんですか？」

「”可愛い子には旅をさせろ”ってことらしいね、ネクロマンシーには自分の作ったドールを娘のように思う奴が多いらしいから経験を積みさせる為に連れてくるそうさ。」

「私には、よくわかりませんね。」

「理解してやる必要はないだろう、結局は奴らの自己満足なんだ。」

そう言い切ると婆さんは一度喉を潤す。

「さて、簡単な説明はしたつもりだが分かったかい？」

「なんとか、大丈夫です。」

「……わかった……」

「なら重畳、本題に入ろうかい。」

その言葉を聞き、俺以外の幽霊船のメンバーの空気が張り詰める。

それを真似たのか、チビ助もすこし背筋をのばした。

「坊やには書類を渡したが、現在オオサカで一月に確認された新しいドールの数が三十倍になってしまっている。」

「今まではどうだったんですか？」

「一月に二人出れば多い方だったね。」

「ってことは一月に三十人以上、ですか!？」

「入ってくるのは簡単とはいえ増えすぎだろ。」

「そうさ、増えすぎなんだよ。もつと緩やかに増えるなら納得はでき

たさ、だがこれは明らかに何かがある。」

「その何かを見つけて来いってわけか。」

「そういうことさね。」

そういう話なら先に言えば良かったろうに、などとレイレイは考えているだろうが、これはシスターの新人達に対する優しさだろう。

ここまで丁寧な教えてくれる依頼人はまずいないしシスターは教会の上位の幹部、情報はまず間違い無い。

老婆心ってやつだろうか。

「全く、いつまでたつてもお優しいこつた、シスター様々だな。」

「なんのことだかわからんね。」

「んで？前金と報酬は？」

「前金で六十、成功報酬で一人頭三百だ。」

「何をもって成功とするつもりだ？」

「そうさね、確たる裏がある情報を持ってきたら成功、下手人を連れてきたら百追加しようじゃないか。」

この言葉を聞き、俺は受けるつもりでいることをメンバーに目で伝える、すると新人二人以外はOKのサインを出してくれた。

「新田ちゃんとカレンはどうする。どっちでも良いぞ。」

「やりますー！」「やる。」

二人の返事を聞き、シスターに向き直る。

「我々夜明けの幽霊船はその依頼を受諾しよう。」

「そうかい、じゃあ成功を主に祈ろうかねえ。」

そう言うシスターは鞆の中から金を机に積み、部屋から出る。

「送らせようか？」

「いらんよ。」

バタン、と扉の閉まる音を背に皆に言う。

「さて諸君、お仕事の時間だ。」

第一幕 第五話 物資調達Ⅰ

「さて、仕事の話の前に、まずは「自己紹介しよう!」……新人二人は顔と名前をしっかりと覚えておけよ。」

いざ始めようと口を開いた瞬間にリリイに言葉を重ねられてしまった。言おうとしていた内容だったので別に構わないが、一步目を潰されるとやはり気分は良くない。

「はい!一番リリイ行きます!16歳で教会所属のエクソシストだよ、情報関連を主に担当してるよ!洗礼が必要な時はいつでも言っつね!今日からよろしくね!」

いわゆる横ピースを目元でキメながら、二人の新人へと挨拶をかましたリリイ。

高テンションに押されながらも、二人は会釈を返した。

「おいおい、一番槍は俺だろう?」

「へっへーん、遅い方が悪いのさ。」

不満そうにそうつつこむレイレイに対し、リリイはドヤ顔で答える。

「全く、仕方ないから二番手いくぜ!紅麗麗22歳、担当は荒事と運転手だぜ。大抵はここかジェイルハウスに居るから分からないことがあつたらなんでも聞いてきな。」

「じゃあ、次は私が。」

ヴィクトーリア・ペンテジレーア・アレクサンドラ・アルブレヒト・ジャンヌ・ド・ローレーヌⅡドートリツシュ、19歳よ。

名前が長いからヴィクトーリアやヴィツキーと呼んで頂戴、ただ仕事中はペンテジレーアと呼んでくださると嬉しいわ。

金銭の管理を主に担当しているけれど、戦闘もそれなりにできるつもりよ。必要なものがある時は私かリーダーに言っつちようだい。これからよろしくね。」

「んで、俺がリーダーの八神修だ。担当は……まあ、色々やってる。」

少しそっけない挨拶になっつしまつたが一度してるしこんなものだろう。

「では次は私が、新田飛鳥19歳です。えっと、主に薬の調合と言語関係のお仕事ができると思います。戦闘はあんまり得意じゃないかもです。今日からよろしくお願いします！」

「……カレン……10歳……だと思おう……調べ物は苦手……機械ならなんでも……動かせるはず……話すのが……難しい……でも……お話は……好き……よろしく……お願いします……」

二人の自己紹介が終わると三人からの拍手が送られる。その拍手が止むのを待たずに二人に何も彫られていない認識票を二枚ずつ渡す。

「その認識票は此処の電子鍵にもなっているから失くすなよ、片方は足にでも巻いておけ。」

新田は自分でつけたようだが、カレンの方は手が首の後ろまで届かなかったようでレイレイにつけて貰っていた。

「さて、これで正式に二人は幽霊船への加入が完了したわけだが、先達として二つほど、お節介だ。

自分の心の拠り所を決めておきな、物でも人でも場所でも構わねえ、このクソツタレた世界で生きてくにはそれが必要だ。」

「あとは自分の目を信じてやることだ、この街には嘘も真もつけられやしないものばかりが溢れてる。だが、自分の目で見ただけは疑いようのない真実だ、それは覚えておけよ。」

「目の無い亜侠に命は無いって標語もあるくらいだしね。」

「なんだそりや、聞いたことないぞ。」

「今作ったからね！」

「はい、覚えておきます。」「……覚えた。」

話しておくことも今のところはないだろう、そろそろ話を戻さんと
な。

「うし、ちと話を戻して仕事の話を始めろぞ。」

「了解」

この一言で空気が締め上がる。

「婆さんからの依頼は下山人の情報の確保だが、仕事の内容上間違はなくそれだけじゃ済まんだろう。先手を取る為にもレイレイとリイは情報収集、ルートは任せる。残りは俺とお買い物だ。今の時刻は…」

「十時三十分です。」

「なら五時に此処に再集合、一時間ごとの定時連絡は無しでいい。んじゃ一時解散」

「期待してくれよ、リーダー。」

「しっかり良い情報持ってくるからね」

二人はそう言い、会議室を後にした。

二人を見送るとヴィツキーに金の用意を頼み、新人二人を連れハンガーに向かう。

チョッパの店なら新人でも撃てるのを用意してくれるだろう、それにゾンビや化け物を相手にするにはレイレイやヴィツキーはともかくあまりに火力が貧弱すぎる。

「リーダー……買い物って……?」

「職業柄、戦闘が苦手でも避けることはできん。もちろんできるだけ避けるつもりだが、一度の依頼で必ず一回はドンパチ楽しくねえパーティは開催されちゃう、なら威嚇程度でも武器はあった方が良くからな。」

「銃ならリーダーに貸してもらったものや、カレンちゃんがもともと持ってたのはダメなんですか?」

「駄目だな、どっちも二人の体に適切なもんじゃねえ、でも俺たちはあまりその辺の知識は無えからな。だからその道のプロのそこへ行くぞ。」

ハンガーに着くとヴィツキーがトランクを二つゴライアスに積み込んでいるところだった。

「いくら用意した?」

「今回の依頼は嫌な予感がするから千ほど用意したわ、足りるか」

ら。」

「ちと多い気もするが。」

「備えあればつてやつよ。」

「千つて…一千万…ですか？」

ヴィツキーと話していると新田が顔を青くしながらそう尋ねてきた。

「ええ、そうよ。本来ならもう少し出したいのだけれど、今は少し控えめにしたわ。」

「リーダー…一千万つて…多いの？」

「まあ、二人の武器を揃えるだけなら過剰すぎるくらいだろうが、今回の依頼を鑑みるとちと多いくらいだな。」

「ヒエツ」

「飛鳥…鳥みたいいな…声…」

「名前通りだな。」

「ね。」

カレンと笑っていると怪獣の唸り声のような爆音がハンガーに響く。突然の音に驚いたのかカレンは眠そうに半目だった目を見開き、新田は腰が抜けてしまったようでぺたりとへたり込んでいた。

「リーダー、いつでも出れるわよ？」

「おう、んじや行くか。ほら、新田ちゃん、とつと立ちな。」

「リーダー、立てませえん。助けてくださあい。」

まったく仕方がないやつだ。手を貸し立たせてやるように見せ、新田が手を出した瞬間、その手を引っ張り無理やり俵のように担ぐ。

「ちよつと!?リーダー!?こんな体勢嫌です!下ろしてください!」

抗議の声を無視して後部座席に叩き込む、カエルの潰れたような声が聞こえてきたが無視だ無視。両手を万歳のように上げたカレンを抱き上げ乗せてやり、自分も助手席に乗り込む。

俺が乗り込んだのを確認するとヴィツキーはアクセルを踏み込み、ハンガーから公道へと出た。

「リーダー!もう少し優しくしてくれてもバチは当たらないと思いますよ!」

「しるかよ、それに悪いが俺は神も仏も嫌いなんだ。」

「リーダー…：神様…：嫌い？」

「リーダーは神に嫌な過去しかないもの、あんなことがあればどんな敬虔な信者でも嫌いになるわ、私は絶対にごめんね。」

「ああ、思い出すだけでも憂鬱になりそうだ。」

あの蛸、落とし子だがなんだか知らんが次に会ったら絶対にぶつ殺してやる。

「って言っても一応信じてる神もいるんだがな。」

「え!?!いるんですか!?!」

「おう、スパモン教だぜ。」

「ジョークじゃないですか!」

ラーメン、つてな。

三十分ほどだろうかそうこう話していると、とある店の前に着く。

その店は、大きな豚が血まみれのエプロンを纏いサムズアップを決めている豚の看板を掲げた肉屋だった。

「着いたわ、降りて頂戴。」

「肉屋チョッパ…：…?」

「おう、とりあえず中入るぞ。」

店の中に入るとオオサカじや珍しく合成肉やホトケ肉だけでなく、上質な純正国産肉や信頼のある外国産の肉が並んでいた。

俺たちに気づいた大柄な店長、肉屋チョッパの兄弟店主の弟であり表の顔を担当する、主にチョッパと呼ばれる方、ジェイソン・チョッパが笑顔で出迎えてくれた。

相変わらず爽やかな笑顔をしてやがる。

「ようー！キャップ！久しぶりだな、今日は何をお求めだい？」

「チョッパ、いつものは入ってるか？」

誰にでもわかるような簡単な合言葉をチョッパに言う。

常々思うのだが、こんな簡単な合言葉でいいのだろうか。

「おう、いい豚肉が入ってるぜ、奥へ来な。バイトお！ちと任せるぞお！」

チョッパーに案内されいつもの店の奥へと進んでいく。

「キャップ、その二人が例の新人か？」

「そうだが、随分耳が早いじゃないか。」

「そりやあそうさ、なんとたつて幽霊船に新人だぜ？色めき立たねえ奴はいねえよ。」

「なら、来た理由はわかるな？」

「任せな、さつきも言ったが今日は良いのが入ってるんだ。兄貴も大興奮で昨日からずっと部屋に籠ってらあ。」

「それは期待できそうだ。」

奥の部屋に続く扉を開けると肉屋とは思えない光景が広がる。

四方には木製の長方形の箱が山のように積まれ、壁にはありとあらゆる国のありとあらゆる銃がかかっている。

「兄貴！客だ！」

その声に反応し、部屋の奥から身なりの整った背の低い男が出てきた。

「おや、これはキャプテンにヴィクトーリア様。ようこそおいで下さいました、御新規の御二方も一緒にようで。私肉屋チョッパーの店主、マリオ・チョッパーと申します。」

「んで、俺がその弟ジェイソン・チョッパーだ、ご贔屓によろしくな！」

「どうも……カレン……よろしく」

「新田飛鳥です、よろしくお願ひします。」

「してキャプテン、本日はこのお二人のを見繕えば？」

「ああ、よろしく頼む。ヴィツキー、付いてやってくれ。」

「ええ、私も少し見たいものがありますから構いませんわ。」

「ではお三方、こちらへどうぞ。」

三人がマリオに別の部屋へと案内され、部屋に残ったのは俺とジェイソンだけになった。

「んで、キャップは何をお求めで？」

「化け物狩りに適した物を見せてくれ。」

「あいよ、じゃあまずはアメリカ製のピクニックハムだ。」

「そう言い、木箱を一つ机の上におく。」

「中々の上モノだ、”豚嫌い”が特に好む。」

開かれた木箱に入っていたのはカスタマイズされたバレットM82だった。

「こいつはアメリカで直接俺が買い付けたから真贋については心配いらねえ、もちろんしつかりカスタムしてあるぜ。口径は12.7のままでが銃身長は736.7から800.0へと伸ばしてある、その分重さも増したが安定感と精度は元の三倍以上だ。弾は12.7ミリチョップパーリロード弾、勿論炸裂弾もあるぜ、弾倉も拡大して15発入る。並の装甲車なら一マグで4、5台は余裕でぶっ壊せらあ。」

「あとで試射させてもらおう。」

手に取ると、ズッシリとした重量と新品特有の謎の冷たさが伝わってくる。

それに、相変わらず良い仕事をしたようで自然と手に馴染む。

これは買いだろうな。

「じゃあ次はスペアリブだ、こいつは食らえば頬が落ちること間違いないしだぜ。」

次に取り出されたのはMG4だった、ドイツ製か。

「こいつはまた随分良いブランドじゃねえか。」

「おう、こいつを仕入れるには苦労したぜえ？こいつもしつかり見てあるから安心しな。」

「それで？どういう下味がつけられてんだ？」

「基本的な部分はあまり弄っちゃいないが、チョップパーカスタムって事でレートを上げたな。毎分7〜850発から毎分950以上になってるから、こいつが二丁あればビルだつて一瞬で穴あきチーズさ。口径は特に変わってないが弾は勿論チョップパーリロードの徹甲弾、有効射程が1200まで伸びたぞー！」

「重さは？」

「こいつだけなら9kgジャストだな。」

「悪くない。」

他の肉の説明も聞き試射も終わらせ、一時間程経った頃、三人がマリオと共に戻ってきた。

新田の手にはワルサーだろうか？小さめの銃が一丁、対してカレンは自身の身長の倍ほどもありそうな鉄塊を両手で満足そうに抱えていた。

「まあ随分なモノを勧めたもんだなあ兄貴は。」

「私だって、ヴィクトーリア様以外にこれを撃てる方がいらっしやるとは予想外でしたよ。」

苦笑いとも取れるような表情を浮かべるマリオとは対照的に、カレンの顔は少し嬉しそうな表情をしている。気がする。

「あれは？」

「ああ、キャップにも見せたバレットあつたろう。あれを俺たち兄弟が酒の勢いでフルカスタムしちまったのさ。」

それにしてもデカすぎだろう、3メーターはあるぞ。銃自体の厚さも俺が見たものの二倍ほどはある。ヴィツキーはあれ撃てるのか、たまげたものだ。

「なんだ？ドラゴンでも相手にするつもりで作ったのか？」

「いやあ、俺たちもまさかあそこまで興が乗るとは思わなくてよお、気がついたらあの姿だ。思わず笑っちゃったよ。」

「リーダー…私…これに決めた…」

「私もこの子にします！」

二人は笑顔でそう宣言する。片方は笑顔かわからんが、多分そうだ。

「キャプテンには私から説明しましょう、新田様がお選びになったのはワルサーP・38、言わずと知れた名銃にございます。カスタムはマガジンのみでしたっぴかりと素の味が楽しめるようになっております。

カレン様がお選びになったのはバレットM82チョップパーカスタム、ジェイソンから聞かれた通り我々兄弟が全力で組み上げた芸術品でございます。全長3000ミリ、口径は905、約23ミリの特製のライフル弾を使用します。

本来なら特注の専用ライフルで撃ち出す物ですがそこはチョツ

パー兄弟の腕の見せ所、既製品のバレットM82をカスタマイズすることによって射撃を可能に致しました。」

「とんでもない化け物だな。」

「私も試射したけれど、肩が外れそうになったわ。少なくとも人が撃つものじゃないわよ、アレ。」

肩が外れそうになるだけのヴィツキーも大概だと思いが言うことやこしくなるだけだ。

「よくそんなの撃てたなカレン。」

「よゆー……」

「私もまさかこれを立射するとは思わなかったわ。」

「立射あつ!?!」

ため息をつきながらぼやくヴィツキーの言葉に、思わずジェイソンと声が重なる。

この体のどこにそんなパワーが詰まってるのやら、ドールってのは無茶苦茶だな。

「リーダー……これ良い……」

「まあ、本人がいろいろ言うなら何も言わねえけどよ。ジェイソン！ピクニックハムを一つスペアリブを二つ頼む、それと二人の合わせていくらだ？」

「毎度お！ピクニックハム一つにスペアリブ二つ、ドイツソーセージにワイルドステーキ肉だから……下味諸々含めて600つてとこだな。兄貴、包装頼むぜ。」

ヴィツキーからトランクを受け取り、ピッタリ600を机の上に積む。

ジェイソンはそれを確認すると木箱を三つ差し出してくる。

二人は包まんようだ。

商談を終え、再び表の肉屋へと戻りチョッパー兄弟に見送られる。

「また必要なもんがあればいつでも来な！なんでも揃えてやるぜ！」

「またのお越しをお待ちしております。」

見送られた俺たちはゴライアスに乗り込み、つぎの目的地を目指

す。

「リーダー、次は何処に行くんですか？」

その問いに満面の笑みを浮かべて答える。

「工房だ。」

第一幕 第六話 物資調達2

目的の工房の前に着いた俺は1人ゴライアスから降り、玄関へと歩く。

「ヴィツキー、そっち頼むわ、時間と場所はさっきの通りでよろしく。」
「使いつ走りだなんて、レデイに対する礼儀を学び直した方がいいのではなくて?」

「悪いが少し気分が乗り始めちまつてる、冷めたらまた優しい紳士に戻ってやるから我慢してくれや。」

「悪い癖ね。」

「お前が言うかよ。」

流石にこの顔は二人に見せるにや早すぎるからな、もう少し慣れてからじゃねえと。ああ、クソ、ダメだな、かなり落ち着いたつもりだったがなあ。

こんなんじや師匠に笑われちまう、あんな本読むんじやあなかつたぜ。

離れて行くゴライアスへ後ろ手に手を振り、工房の玄関へと歩く。
いつも通りの、手入れが行き届いた庭園を抜け、馬鹿でかい外れてしまっている門を超え、やっとの事で玄関の戸を叩く。

「おーい、大和の爺い、八神だ、来たぞお。」

2、3度叩くと中から一人の女中が顔を出した。また新顔かよ、あの爺いい加減枯れねえかな。

「大変お待たせいたしました八神様、旦那様は工房にてお待ちでございますので御案内させていただきます。」

「ああ、頼むわ。」

女中の案内に従い屋敷の中へ入る。

<<目星：60——>>20 成功!>>>

女中の後ろに着いて歩いてしていると首筋に巻かれた包帯が目に入った。

「おいあんた、その首大丈夫なのか?場所はわかるから俺一人で行く

が？」

「いえ、お気遣いなく。」

「そうかい。」

よくよく見てみると首だけでなく、肩の方まで包帯が巻かれているのが見えた。まさかあの歳でハードプレイに目覚めやがったか。

2分ほど歩くと、あらゆるものを拒絶するようなクソ分厚い鉄の扉の前に着く。

すると、女中がピッタリ45度に頭を下げ言う。

「私はここに入る事は許されておりません故、大変申し訳ございませんがここからはお一人でお願いいたします。」

「おう、ここまでありがとな。」

そう答え、去る女中の足音を聞きながら重たい扉を開ける。

扉を開けた瞬間に感じたのは、サウナかと勘違いしそうな程の熱風であった。中は酷く暑く、壁にかかった温度計を見ると50度を超えようとしているところだった。

出来るだけ扉に近い場所で、最近耳が遠くなり始めた爺のために出るだけ声を張り呼ぶ。

「おーい！爺！八神だ！来たぞー！」

呼びかけてから数秒ほど待ったものの返事はなく、干からびさせにきているとしか思えない熱気が漏れ出すだけだった。

冗談だろ？この地獄の中に入らないといけないのか？くそッこんな事なら後回しにすれば良かった。

後悔先に立たずとはよく言ったものだ。シャツのボタンを緩めながら覚悟を決め、地獄へと足を踏み入れる。

馬鹿みたいな暑さに辟易しながら、爺を探し工房内を歩き回る。たった数秒でシャツが肌にピッタリと張り付く程の汗をかき始める。あまりの不快感に、上がり始めていた気分がジェットコースターの如く一瞬で急降下する。

しかし、ここはいつ見ても魔女の釜の底のように物が溢れている。鉄塊やハンマーから、何に使うのかわからないような揺り籠まで

置いてある。他の工房員のアジトも大抵滅茶苦茶に散らかっているが、爺の工房は特別に酷い。ここを掃除しなきゃいけない女中達に思わず同情してしまう程には酷い、悪臭がしないだけまだマシだが。

<<<聞き耳：75——>>35 成功！>>

迸る熱気に顔をしかめながら五分ほど歩いた頃だった。この部屋のどこからか俺の名前を呼ぶ、聞き覚えのある声が聞こえて来たのだ。その声の出どころを探すと、大量の革で出来た山の下敷きになった手を見つけた。

「八神、儂はここだあ。」

「なんだ？自分で墓を作ったか？そりゃあいい、女中供の手間も省けるってもんだ。」

軽口を叩きながら爺を山から掘り起こす。

掘り出してやると爺は、服をパンパンと叩き埃を払い、笑いながら礼を言う。

「いやあ、助かったわい、急に上から革がふってきてな！死ぬかと思っただぞい。」

「どうせ酒飲みながら作業してたんだろ？」

「それはいつものことじやろう。いやな、今作つとるモンが常温のところに置いとくとぶっ壊れちまうもんじやから部屋の気温を上げとつたんじやが、どうも熱中症になっちまったみたいでなクラツときてそのままぶっ倒れたんじやよ。いやあ酒じや水分補給にやららんかったわ。」

「阿呆め、そんなわかりきった事すんじやねえよ。」

今この爺に死なれるのは大変困る、オオサカ一の偏屈で変態だが腕は超一級品なのだ。俺が引退するまでは頑張ってもらわねえと。

「まあ、爺が阿呆だって事は今更どうでもいい、依頼のはどこにあんだ？」

「おお、そうじゃったな、ほれ付いて来い。」

爺に連れられ、さらに工房の奥へと進む。奥へ奥へと進むに連れ少しずつ気温が下がってきた。やっと人が過ごせる空間へと来れた。

「しっかしあれじゃな、八神、お前かなり汗臭いぞ。そろそろ加齢臭の

出始める頃じやろ？もつと気を配った方が良いぞ？」

その一言に俺の額には青筋が走り、口角が引き攣る。この爺、今すぐぶち殺してやろうか。

ホルスターから二本とも抜き、爺のこめかみにピッタリとくっつけてやる。

「死にたいらしいな。」

「冗談じゃよ、そうカツカするな。それより、ほれ着いたぞ。」

爺が指す方へと視線を向けると、漆黒の”ソレ”が、机の上に陰陽の形で飾られるように置いてあった。

「お前の依頼通りに仕上げたが、本当にこんなじゃじゃ馬でええのか？」

爺の声を背に”ソレ”の片方を右手に持つ。見た目通りのズツシリとした重量、ツヤが消された、ふと覗けば飲み込まれそうな真つ黒なボディ、あまりの美しさに下品にもよだれが滴りそうになる。

もう片方も左に持ち正面に構える、ああ、やはり手に馴染む。体の一部のように、なんてものではない、パズルの最後のピースがピッタリとハマったような、言葉にできない快感を感じる。

「ああコイツはこれで、いやこれが良い。」

師匠のお下がりでも十分以上にやれるが、やはり”コレ”じゃないと落ち着かない。もはや自身の片割れとも言える”コレ”がない間は、まるで想い人を待つウブな童女のような気分だった。

「最高だ！完璧だ！やはり俺はコイツじゃないと！」

「まったく、お前の依頼だからこそ槌を握ったが”ソレ”の相手は二度とごめんじゃ。」

爺はそう言うふと、思い出したように尋ねてきた。

「そういえば今更じやが、その二丁の名前は決まっとするのか？」

「お？教えてなかったか、コイツらはな。」

名前を口に出そうとした瞬間、先程案内してくれた女中が工房に飛び込んできた。

<<目星：60——>>48 成功！>>

酷く息が乱れており、先程まで立派で瀟洒な雰囲気醸し出して

た女中服も所々煤けてしまっている。

「おい、どうしたんじや。」

爺の問いかけに息も整えず、吐き出すように声を絞り出す。

「敵襲でございませすー！」

第一幕 第七話 襲撃

「敵襲でございますー!」

女中がその言葉を発した瞬間、目の前の鉄扉が吹き飛ばされ、五人の男女が中へ入って来る。

女中と爺を隠れさせてやる余裕もないので、次の一手を打つために不審者達の観察を始める。

先頭は右手に青竜刀を持った切れ長の目をしたチャイナドレスの女。

後ろに続くのは黒のスーツに黒のサングラス、黒のネクタイと全身真っ黒な護衛のような男達、武器は全てmp5だろうか。

あれ、コイツらどこかで見た気がするな

<<アイデア：80——>>81 失敗>>

どこで見たんだったか、忘れてしまったな。

「へー、オオサカ1の男の工房って言ってもこんなものなんだ。これなら私達のとこの方がよっぽど良さそうね。」

「いきなり人の家に乗り込んできて家主への一言目がソレか、随分と教育がなつとらんようじゃな。」

「これはこれは大和の翁、あんまりにも貧相な姿をしているものだからてつきり迷い込んだ浮浪者が何かだと思ってたわあ。あら、それにボロ船の船長サンまで居るじゃない、手間が省けるわあ。」

ボロ船とは言ってくれるなあ。安い挑発と分かっているながらも、小憎たらしい顔も含めて少し苛立つ。

「手間だあ?」

「ええ、貴方達にはここで死んでもらうわ。」

チャイナドレスが、こちらへ青竜刀の切っ先を向けると、背後に控えていた男達が一斉に銃口を向ける。

こんなところでやる気かよ、随分と血の気が多い事だ。

「へ?なんじゃと?すまんのお、最近耳が遠くなってしまうって聞きづらいいんじゃ。」

なあ、八神やわしの聞き間違いじゃ無ければ、わしらを殺すとか聞

こえたんじやが。聞き間違いか?」

「ああ、ここまで清々しい宣戦布告は久し振りに聞いたなあ。」

殺害宣告をされたと言うのに笑顔を浮かべるほど余裕な態度の俺たちに、思わず困惑し、苛立った様子でチャイナドレスが口を開く。

「何故笑っていられるの? 貴方達は私達にここで殺されるのよ? まさか気でも狂ったのかしら?」

その言葉に爺は堪えきれなくなったようで、腹を抱え、目に涙を浮かべる程に笑う。

爺の様子にチャイナドレスだけでなく、後ろの男達にも困惑が広がる。まさかとは思うがこいつら、誰に喧嘩を売ったのか理解していないのだろうか。

「ここに来たのが私たちだけだから油断でもしているのかしら、今この屋敷には私たちを含めて50人が貴方達の命を狙っているのよ? それでも笑っていられるのかしら。」

「50人かそりゃあ良い、たった5人じゃ退屈しないか心配してたんだ。」

その言葉で頭に血が上ったのか、顔を真っ赤にして、男達へと射撃の指示を出そうとした瞬間、工房に4発の銃声が響き渡った。

仁義なき戦い発動!

先制0ターン目

二丁拳銃により技能値—20%

<<拳銃:75——>01 クリティカル!>>

以降3発全て成功にて命中

顔に新しい穴を開けられた黒服四人は、銃声の出所が俺の手に握られている二丁の”ソレ”だと気づくこともできず、糸が切られたかのように床に倒れ赤い水溜りを作る。うん、やっぱりこの二丁が一番だな。

突然の攻撃にチャイナドレスは目を丸くし、口をパクパクと開くだけで何もできなくなってしまっている。最近襲撃者の質が下がっている気がしてならない。

「おお、さすがじゃなあ全部眉間のど真ん中じやった。」

「これでもガンマンやってるんでね、このくらいは出来ないよ。さて、メイドと自分の安全は頼むぜ。」

「どこへ行くんじや?」

「決まってるんだろ? 殲滅戦さ、今回は特別にタダでいいぞ。」

新しい弾を二丁の”ソレ”に装填し直していると、ふと視界の端で何かが動いた。

<<目星：60——>>21 成功!>>

おいおい、冗談だろ? なんて眉間をブチ抜かれた人間が動けんだ?

まさか未来から来た殺人ロボットじゃあるまいし。まあ、今更死体が動いた程度で動揺したりはしないが、それでも驚くものは驚く。

爺や女中も気づいたようで、黒服へと警戒の視線を向けると、その隙を見計らったようにチャイナドレスは即座に工房から出て行くこうとする。

「逃すかよ。」

<<拳銃：95——>>65 成功>>

逃げる足を潰すために膝を狙い引き金を引いたが、黒服がチャイナドレスを庇うように立ち上がり防いでしまった。

「なんだあ、ありゃ? まさか機械仕掛けだったりせんじやろうなあ。」

「それはそれで面白そうだが、血が出てるから多分違うぞ。さてどう殺したもんか。」

まあ、打つ手は大体決まっているんだがな。

チャイナドレスは諦め、改めて黒服達に意識を100%向けると爺達にしか聞こえないような声量で呟く。

「気が狂いたくなけりゃ、30秒くらい目と耳塞いどけ。」

「あ? なんじやと? 聞こえんぞ、もっと大きな声で言ってくれんか?」

「旦那様、八神様は目と耳を塞げと仰られました。」

「おお、そうか、ならしつかり塞いどくかの。」

二人が目と耳を塞いだのを確認すると、自分でも理解できない言語を紡ぐ。

確かこれは違う世界の化け物呼び出す魔法だったはずだ、間違っ

てないといいが。

黒服達がゆっくりとこちらに距離を詰め、後数メートルで手が届く、と言ったところで床に大きな魔法陣のようなものが神々しくも禍々しく浮かび上がった。その魔法陣の中には黒い球体が浮いており、その球体はまるで心臓のように脈動している。

<<眷属の招集>>

MP：16——>8

召喚クリチャー二体。

体から何かが抜ける感覚を覚えた瞬間、魔法陣は消え、球体ごとりと床に落ちる。

まるで魂が欠けたかのような感覚に襲われ、常人ならば悲鳴を上げながら嘔吐していただろうほどの恐怖感が脳を支配する。

自分が知らないはずだが知っている世界の人々が、人間の理解を超えた、生命体とは言い難い姿をした化け物に蹂躪され、虐殺され、凌辱されているイメージがいくつも、何度も、視界に浮かび上がってくる。

だが、それだけだ。

SAN：40——>39

視界が元に戻り、全身の感覚がハッキリとしてくると、黒い球体は脈動をやめ、ゆっくりと形を変えてゆく。

円柱に近い形の胴体に二本一對の腕、丸みを帯びた頭と、ここまでならば人間と言えなくもない形だが、そこからさらに醜悪で見るに耐えない姿へと変質する。

一對の腕の両肘からは新たな腕が三本ずつ生え、頭にはブーメランのような形をしたツノのような何か、胴からは10本程の蛸のような足が直接付いている顔のない二体の怪物が歓喜のように聞こえる産声を上げた。

エルドラージのドローンだとか何とかいう種族だったはずだ、時計塔で師匠にそう教えてもらったはずだ、多分、おそらく。

「さあ、その餌どもを親分達に持って帰ってやりな。」

そう言つてやると、二体の怪物は黒服へと腕を伸ばし二人ずつ拘束

すると、まるで鯖折りかのようにギリギリと締め付ける。

<<キャッチ：50×2——>25，49 成功！>>

<<キャッチ：50×2——>34，6成功！>>

黒服達は必死に逃れようと対抗するが、力の差がありすぎるのかビクともしていない。

ミシミシと黒服達の体が軋み始めた頃、黒服の一人が口を開いた。「貴様、”ウイザード”だったのか。」

「なんだお前、話せたのか。てつきり地獄で閻魔様に舌抜かれてるもんだと思ってたぜ。」

「なぜ”ウイザード”が工房にいるのだ、貴様らは相容れぬ存在ではなかったのか。」

「何か勘違いしてるようだな、俺は”ウイザード”じゃなくて”メイガス”だぞ、”ウイザード”は師匠の方だ。」

これ間違えると時計塔の奴らが顔を真っ赤にして罵倒してくるからなあ、あいつら品性だの何だの言ってるくせにえげつないくらいの差別主義だし。ここ、テストに出てきたぞ。

「何が違うというのだ。」

”ウイザード”というか”ワイズマン”は今こそ魔法使いって意味で使われてるが、本来は賢き者って意味だからな。

あいつらは過去、今、未来、あらゆる知識を持つてる奴らのことだよ。」

「俺たち”メイガス”とは全くの別物さ、”メイガス”は”ウイザード”の知識や技術から学んで新しい知識を生み出す魔法使いのことだ。まあ、この説明だと俺は”メイガス”とは言えないんだけどな。」
ここまで教えてやる必要は無いのだろうか、俺を見ているのが黒服達だけじゃあ無い以上油断しているように見せてやるのが最善の手だろう。

覗き見とは趣味が悪いな、どうせなら堂々と乗り込んで来りやあいのに。

「おっと、喋りすぎたかな。そろそろお前達のお仲間も探さにやならん、と言うわけで。死んでくれや。」

俺の一言に二体の怪物は黒服達を締め上げる力を強める。

黒服達は必死に抵抗をするが骨の折れる音とともにその抵抗は終わる。が、一応念のために、全ての黒服の眉間と心臓と股間に1発ずつ撃ち込んでおく。

「もう持っていていいぞ。そいつらで足りないようなら、そいつらと同じ服の奴らは好きにだけ持ってきな。」

幸い、ここには爺の趣味で女中しかないから巻き込まれる心配はないだろう。多分。

怪物達が黒服を担いだまま工房を出るのを見届けると、爺達の方に向き直る。

あいつらまだ目と耳塞いでやがる。

女中に至ってはしゃがんで嗚咽を漏らしながら、ガタガタと震えてしまっている。

さては、呪文を聞いたな？せつかく忠告してやったのに酷いやつだ。

というか、俺30秒って言ったはずなんだがな何でこいつらまだ目と耳塞いでんだ。

爺に声をかける前に、先に女中を正気にしてやったほうがいいだろうか。

そう思い、女中の前まで歩きしゃがみこむ。

女中は目の前まで来た俺に気づいたのかゆっくりと目を開いた。その目には俺が映ってはいるが、俺が見えてはいないようで目線はあらゆる方向に飛んでしまっている。

「いあ、我は、我は、いあ、いあ、……」

おっとこれはマズイ、急いで女中に落ち着くように暗示をかける。

「いあ、い、あ？あれ？私は一体？」

「まったく、耳塞いでろって言ったのに。大丈夫だったか？」

「あ、はい、ありがとうございます。大丈夫です。」

「そりゃよかった、爺は頼むわ、今度こそ外の潰してくるから。」

女中の返事を待たず、鉄扉の破片を蹴り飛ばし、工房から飛び出す。

すると、聞き覚えのある不愉快な声が俺の耳を撃つ。

「よおお、兄弟、久しぶりだなあ、お前に会いたくて地獄から戻って来てやったゼエ？」

「おいおい、今日は厄日か？まさかテメエが出てくるなんてなあ。」

そこにいたのは、俺が殺したはずの最悪の男、”黒髭”だった。